

☆復活節第3主日(4月26日)の聖書朗読☆ ※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (使徒たちの宣教 2章 14, 22~33節)

五旬際の日、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。

ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。あなたがた自身が既知のとおりです。このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。

しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。ダビデは、イエスについてこう言っています。

『わたしは、いつも目の前に主を見ていた。主がわたしの右におられるので、わたしは決して動揺しない。だから、わたしの心は楽しみ、舌は喜びたたえる。体も希望のうちに生きるであろう。あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、あなたの聖なる者を朽ち果てるままにしておかれない。あなたは、命に至る道をわたしに示し、御前にいるわたしを喜びで満たしてください。』

兄弟たち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今でもわたしたちのところにあると、はっきり言えます。ダビデは預言者だったので、彼から生まれる子孫の一人をその王座に着かせると、神がはっきり誓ってくださったことを知っていました。そして、キリストの復活について前もって知り、『彼は陰府に捨てておかれず、その体は朽ち果てることがない』と語りました。神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。」

## 第二朗読 (ペトロの手紙Ⅰ 1章17～21節)

愛する皆さん、あなたがたは、人それぞれの行いに応じて公平に裁かれる方を「父」と呼びかけているのですから、この地上に仮住まいする間、その方を畏れて生活すべきです。知ってのとおり、あなたがたが先祖伝来のむなしい生活から贖われたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはならず、きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです。

キリストは、天地創造の前からあらかじめ知られていましたが、この終わりの時代に、あなたがたのために現れてくださいました。あなたがたは、キリストを死者の中から復活させて栄光をお与えになった神を、キリストによって信じています。従って、あなたがたの信仰と希望とは神にかかっているのです。

## 福音朗読 (ルカによる福音書 24章13～35節)

ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。

その一人のクレオパという人が答えた。

「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったことを、あなただけはご存じなかったのですか。」イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。仲間の者が何人か墓へ行って見たのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」

そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。

一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。

一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

#### 朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

#### 足立教会の信徒の皆様へ

いかがお過ごしですか。コロナウィルスの勢いはまだまだ止まりそうもありませんね。社会情勢もますます厳しくなり、出かけることもほとんどなくなりましたね。今はもう引き籠ることが最善のようですね。みんなでそうしましょう。ある意味昔の修道者のように、祈りと断食に励む生活もいいかもしれません。これからは五月の連休がありますので、せめてその期間でもやってみてはどうでしょうか。聖人伝とか聖書の解説とか、いろいろとあるでしょう。教会のホールにも図書とかがありますのでお近くの方は散歩がてら借りていただきます。今は公認の引き籠り生活を実践してみましよう。

4月26日の日曜日はエマオの出来事が中心になっています。昔私が神学生だった頃サレジオ会では復活節の日曜日の次の月曜日は「エマオの遠足」というのが習わしでした。今はそんな悠長なことはできませんが、特に今は出歩くことも難しいですから、生活の中に聖書の出来事を織り込むということはマネしてもいいのではないのでしょうか。



**第一朗読** （使徒たちの宣教 2章 14、22～33 節）

この個所はペトロの説教が読まれています。というのもペトロはイエスの復活の証人ですし、イエスから力をいただいて、受難の時の汚名返上のために特に力が入っているようです。そしてその言葉にはイエスへの愛情が溢れているようです。「神はあなた方が十字架につけて殺したイエスをその苦しみから解放し、復活させて救いを全うさせた。あなた方は今そのことを見聞きしているのです」と。ペトロはこのことを当時のユダヤ人たちにいたるところで何度も何度も証言していたのです。以前のようにおどおどした様子もなく、力強く堂々としています。イエスが本当の救い主であることを、彼は本当に理解しすべてをもって証言しているのです。私たちは今の時代の人々にこのように堂々と力強く証言できているでしょうか。

**第二朗読** （ペトロの手紙Ⅰ 1章 17～21 節）

ここでペトロはイエスが教えた通り、神を「父」呼んでいます。旧約時代のように「恐るべき神」ではなく、人間を愛するが故に、自分の愛するひとり子をこの世に遣わされた「父である神」を伝えているのです。父なる神とひとり子イエスの関係を理解することが大事なのです。

**福音朗読** （ルカによる福音書 24章 13～35 節）

二人の弟子が気落ちしてエルサレムからエマオに向かう途中の出来事が述べられています。この描写がとても素敵です。読む人それぞれが自分の感性でこの二人の弟子とイエスとの出会いを再現できるからです。多くの画家たちもこのテーマで名画を残しています。この弟子たちの気落ちした姿はイエスの心を甚く刺激したのでしょうか。下を向いたままで歩く二人の弟子にたぶん後ろからそっと近づき声をかけたのでしょうか。そのためか、二人の弟子の目にはイエスの顔とかがはっきりと見えなかったのかもしれませんが。



もしかしたら今までのイエスの顔立ちとは違っていたのかもしれませんが。  
悲しむ心には本当の姿が見えにくいのでしょうか。でもこの二人の弟子たちは  
イエスから特別講義を受けます。その時の心は「燃えていた」と言っています。  
イエスは悩み苦しむ人々を自己責任だと言って放っておいては置かれないの  
です。私たちは自分の心に正直に悩んでもいいのです。イエスは近くにおられ  
私たちの心を聞いておられるからです。私たちがイエスに対して心を開くとき、  
イエスは傍に来てくださるのです。扉のそばに立って私たちがその扉を開け  
るのを待っておられるのです。

余談です。

最近、人類最速の男ウサイン・ボルトさんがオリンピックの100メートル  
決勝(?)の時の映像を流したそうです。テープを切るゴールの瞬間です。  
なぜでしょうか。答えはソーシャル・ディスタンスの宣伝のためでした。そう、  
ボルトさんは二位の選手を2メートルも離してゴールしていたのです。

カトリック足立教会  
主任司祭 野口重光

